

令和3年度地域活動支援事業公開審査会概要

日時：令和3年3月14日（日）

場所：ゆめぼりすセンター2F大会議室

午前9時30分～ 開会

- ・宮崎部長挨拶
- ・岩崎審査委員長挨拶
- ・日程説明

午前9時45分～

- ・提案発表

提案者

- ①特定非営利活動法人 絆

事業名：環境美化活動

- ②依那古語り部の会

事業名：「依那古語り部の会」スタートアップ事業

- ③手裏輪（しゅりりん）研究会

事業名：手裏輪（しゅりりん）伊賀地域普及事業

- ④伊賀・赤まんまの会

事業名：消えゆく校歌の収集編さん事業

午前11時15分～

- ・審査結果発表
- ・岩崎審査委員長講評

皆さん本当にごくろうさまでした。今年はある意味、気が楽でありました。件数が多いと、どうしても「採択できません」と言わなくてはいけないことがあったりしますので、そういうことがなかったことは、よかったです。

ただ、件数が少ないということは、これはどのように考えればいいのかということも審査委員の中

で議論になりました。やはり、そういう意味でいうと、コロナで巣ごもりになってしまったのかなとも思います。

地域活動というのは基本的に対面でやらなければならないし、人と人との繋がり話でありますから、そういう意味では、コロナによってそれらの手段をすべて塞がれてしまったというのは、これは辛い話かと思えます。しかしながら、そのような中で、今日お話を聞いて、なるほどと思ったのは、「手裏輪」さんが、「だから動画に活路を見出すんだ」という次の展開を考えておられます。おそらく、このコロナの影響は来年度も免れないだろうと思えます。今は、アフターコロナを見据えたアイドリングの期間というふうに思えます。そのため、その期間に動画を作って、それから、できるところから再開をして、事業の継続を図っていきたいという明確なプログラムを持っておられます。そういった意味では「手裏輪」さんの話は、非常に参考になったと思っています。

今後、それぞれの団体さんの活動を順位付けし、市長に報告をさせていただきますが、一つ一つの事業について少しコメントをさせていただきます。

まずは、「NPO 法人絆」さんですが、環境美化活動は非常に重要でありますし、地域でよく言われる話であります。ゴミが落ちていない、あるいは、空き地に草がぼうぼうと生えていない地域は、やっぱり地域の管理ができています。そういう地域は、地域がしっかりしているんだなといえます。そういう意味でいうと、非常に有効な手法だというふうに思っています。

しかしながら、環境美化活動においても、収益という形できっちりやっていけるかということが、審査委員の中でも疑問ではありました。

それから活動を始められた方々が、しばしばある話でありますけれども、事業の創設者がずっと参加している。そうすると、毎年、毎年1歳ずつ年齢を重ねていくわけで、最後は、高齢の方だけで環境美化活動をやることになる。こういったケースは、実はよくある話です。

様々な活動で、やはり次の世代への引き継ぎというのが、なかなかできないというのが大きな課題の一つになっています。そのような中で、環境美化活動であったり地域活動の場合には、よく言われるのが、次の世代を育成するために、「時間預託制」とか、「ポイント制」です。ここでみんなが手伝ってくれたら、その活動がポイントとして貯めておいて、自分たちが必要になったときは、そのポイントが使えるような、そんな次の世代に使えるようなポイントを整備する。あるいは、5時間地域活動に費やした時間を、通帳に記帳しておいて、そして自分が必要となったときには、それを通帳から引き出す。このように、担い手と受け手が、世代交代を行っていく。こういった手法

は、様々な地域で取り組みが試みられています。そんなことを少し、考えていくという工夫も、必要があるのかというふうに思いました。

それから次に「依那古語り部の会」さんの話ですが、やはり横に繋ぐことの重要性、これはものすごく大変なことだと思っています。それぞれのグループを横に繋ぐ、実は今まであまりなかったことです。また、意識はしてこなかった。ただ、それぞれの活動が先細りになってきている。そういうことからいうと、それらをあわせてプラットフォームを作る、最近の流行り言葉で言えば、プラットフォームビジネスですが、プラットフォームを作っていくというのは重要ですし、これはコロナ禍でもできる話だと思います。それぞれ活動は今までの実績があります。ですから、1年や2年活動ができないからといってたいしたことではありません。しかし、それを横に繋ぐというような話ができるのは、ある意味、コロナがあったからできるのかもしれない。コロナ禍を逆手に取った話だったかと思うし、このプラットフォームビジネスというのは絶対必要なことだし、伊賀市では、意外と全域でいろんなことやっておられます。それを「語り部」というような形で横に繋いでいくというのは、非常に将来展望としては有効なのではないかと思っています。

次に「手裏輪」さんですが、先ほども申しましたが、今、アイドリングの期間なんですよ。アイドリングの期間だからこそ、動画と子供の教室というものを中心に、展開していこうということでもあります。ただ審査委員の方からも心配になっているのは、補助金終了後、収益を上げるようなことができる見込みがつくのか、そういったことが、どうしても心配にならざるを得ないところがあります。とはいえ、今日、実演も見せていただいて、できればこれが伊賀のスポーツとして広がっていけばいいなというふうに思って話を聞いていました。是非、頑張ってくださいと思います。

それから最後に「伊賀・赤まんまの会」の皆さん、審査委員の中では、評価が一番高かったプロジェクトでありました。これは一つには、事業がわかりやすかったというのがあります。会場にいらしゃった皆さんもそのように思われたのではないのでしょうか。それとこのプロジェクトは、終わりが見えていること、これだけ集めたら終わりだという、集めるという事業が終わって、今度は普及に向かっていく、そういうステップが確実に見えるプロジェクトというのは、我々もわかりやすいし、市民の皆さんもわかりやすい話であると思います。それでいて、皆さんの郷愁の意識を誘うというところからも、非常に大きいプロジェクトだなというふうには思っています。

すべての事業にいえることですが、やっぱりシビックプライドだなと思います。伊賀市民として、

あるいは地域の住民としては誇りというものをどういうふう育て、維持するか。というところに、かかっているものと思います。その意味からいうと、やはり重要なのは、子供たちをその活動にどのように引き入れていくかということです。「手裏輪」さんは、それをターゲットに対応しておられます。

実は皆さんご存知であると思いますが、小・中学校は総合的学習の時間があります。そして高校も探求という地域学習をしていく時間設定があります。したがって、小中高とずっと地域との関わりを何らかの形で行っていく。例えば校歌の発掘伝承を一つのプロジェクトにしていく、あるいは語り部としての様々な活動や地域資源を発掘させていく。また、手裏輪の勉強や環境美化活動をやっているんじゃないか。そういった活動を学校の学習の中に、探求という時間、あるいは総合学習という時間の中に組み入れていくということは、これから学校教育でも重要な部分になってきています。

残念ながら、今日も会場に先生方がいらっしゃいますけど、学校の先生方は、教科書をベースに教えるわけです。学習指導要領に基づいて教えるわけです。それ以外の探求の科目というのは、実は地域にそのノウハウがあるわけです。だから、例えば廃校となった校歌を学んでいこうと、学校側に訴えかけていく。学校にやってくれではなく、学校にこういうテーマがありますよと提案していく、そういう形で、発達段階に応じた地域活動への参加というものを促すことができれば、私は、伊賀の土地から残念ながら出ていかざるを得ない人たちがいるにしても、多分それは将来的にはかなり戻ってくるという要因になっていくだろうというふうに思っています。

それとともに、伊賀は、中部と関西の間にありますから、やっぱり地の利がいいせいか、移住者は結構います。そして移住をしてきた人に「この地域はこういう地域なんですよ。」ということをきっちりと教えていく。そういう部分でも私は今日の活動というのは、いろんな形でこれからの地域づくりに大変有意義なものであると思っています。

コロナに負けずに、来年度は何とかなるだろうというふうに思っただいて活動に取り組んでいただきますようお願い申し上げます、講評とさせていただきます。